

令和 8 年度病害虫発生予報 第 4 号（7 月予報）

令和 8 年 7 月 1 日
青森県病害虫防除所

【概 要】

- 水 稲：葉いもち、コバネイナゴは平年並、稲こうじ病は少ない、斑点米カメムシ類はやや多い、フタオビコヤガは多いと予想される。
- りん ご：斑点落葉病、リンゴコカクモンハマキ、モモシンクイガは平年並、リンゴハダニ、ナミハダニはやや多いと予想される。
- 特産果樹：ぶどうの晩腐病、べと病、褐斑病は平年並と予想される。
おとうの灰星病はやや少ないと予想される。
もものせん孔細菌病はやや少ないと予想される。
- 野 菜：じゃがいもの疫病はやや少ないと予想される。
ねぎのさび病は津軽地域でやや少ない、県南地域で少ない、ネギアザミウマは津軽地域でやや多い、県南地域でやや少ないと予想される。斑点性病害、べと病は少ない、ネギハモグリバエ、ネギコガはやや少ないと予想される。
ながいものアブラムシ類はやや少ないと予想される。
キャベツのコナガはやや少ない、ヨトウガは平年並、ダイコンアブラムシはやや多いと予想される。
- その他作物：牧草、とうもろこし類等のイネ科作物のアワヨトウは少ないと予想される。

1 予報内容

(1) 水 稲

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
葉いもち	県内全域	平年並 (初発平年: 7月中旬)	平年並	①6月26日現在、本田での発生は認められていない(±)。 ②向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
稲こうじ病	県内全域	—	少ない	①前年の発生量は少なかった(-)。 ②向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
斑点米カメムシ類 (アカヒゲホソミ ドリカスミカメ)	県内全域	平年並 (第1世代 成虫)	やや多い	①越冬世代成虫の発生盛期はほぼ平年並である。 ②フェロモントラップ及び予察灯での誘殺数は平年並に推移している(±)。 ③向こう1か月の気温は平年より高いと予想される(+)
コバネイナゴ	県内全域	やや遅い (ふ化盛期)	平年並	①予察ほ畦畔におけるふ化幼虫の発生時期は平年より遅く推移している。 ②前年の発生量は少なかった(-)。 ③向こう1か月の気温は高いと予想される(+)
フタオビコヤガ	県内全域	平年並 (第1世代 成虫発生 盛期)	多い	①第1世代成虫の発生始期は概ね平年並である。 ②6月中旬の発生量は平年並である(±)。 ③向こう1か月の気温は高いと予想される(+)

(2) りんご

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
斑点落葉病	県内全域	—	平年並	①6月の発生量は平年並である(±)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
リンゴコカクモンハマキ	県内全域	—	平年並	①6月の発生量は平年よりやや少ない(-)。 ②向こう1か月の気温は平年より高いと予想される(+)
モモシンクイガ	県内全域	—	平年並	①前年の発生量は平年並であった(±)。
リンゴハダニ	県内全域	やや早い (増加期)	やや多い	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される(+) ②6月の発生量は津軽地域で平年よりやや多く(+)、県南地域で平年並である(±)。
ナミハダニ	県内全域	やや早い (増加期)	やや多い	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される(+) ②6月の発生量は平年よりやや少ない(-)。

(3) 特産果樹

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(ぶどう) 晩腐病	県内全域	平年並	平年並	①向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ②前年の発生量は平年並であった(±)。
(ぶどう) べと病 (スチューベン)	津軽地域	—	平年並	①向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ②6月の発生量は平年並である(±)。
(ぶどう) 褐斑病(キャンベル・アーリー)	県南地域	平年並	平年並	①向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ②前年の発生量は平年並であった(±)。
(おうとう) 灰星病	県内全域	—	やや少ない	①6月の発生量は平年よりやや少ない(-)。 ②向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
(もも) せん孔細菌病	県内全域	—	やや少ない	①前年の発生量は平年より少なかった(-)。 ②向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。

(4) 野菜

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(じゃがいも) 疫病	県南地域	—	やや少ない	①6月中旬の発生は認められていない(±)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(-)。
(ねぎ) さび病	津軽地域	—	やや少ない	①6月中旬の発生量は平年並である(±)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(-)。
	県南地域	—	少ない	①6月中旬の発生量はやや少ない(-)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(-)。
(ねぎ) 斑点性病害 (黒斑病・葉枯病)	県内全域	—	少ない	①6月中旬の発生量は少ない(-)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(-)。
(ねぎ) べと病	県内全域	—	少ない	①6月中旬の発生量は少ない(-)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(-)。
(ねぎ) ネギアザミウマ	津軽地域	—	やや多い	①6月中旬の発生量は平年並である(±)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)
	県南地域	—	やや少ない	①6月中旬の発生量は少ない(-)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)
(ねぎ) ネギハモグリバエ	県内全域	—	やや少ない	①6月中旬の発生量は少ない(-)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)
(ねぎ) ネギコガ	県内全域	—	やや少ない	①成虫の誘殺数は平年より少ない(-)。 ②6月中旬の発生量は少ない(-)。 ③向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)
(ながいも) アブラムシ類	県内全域	—	やや少ない	①6月の発生量は少ない(-)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)
(キャベツ) コナガ	県南地域	—	やや少ない	①成虫の誘殺数は平年より少ない(-)。 ②6月中旬の発生量は平年並である(±)。 ③向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)
(キャベツ) ヨトウガ	県南地域	—	平年並	①成虫の誘殺数は平年並である(±)。 ②6月中旬の発生量はやや少ない(-)。 ③向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)
(キャベツ) ダイコンアブラ ムシ	県南地域	—	やや多い	①6月中旬の発生量は平年並である(±)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)

【 穂いもち 】

- ① 水面施用を予定している場合は、各薬剤の防除適期を失しないように注意する。
- ② 茎葉散布を予定している場合は、出穂直前と穂揃期の2回散布し、散布間隔は7日程度とする。なお、出穂直前とは走り穂が見えた時期、穂揃期とは80%の穂が出穂した時期をいう。
- ③ 出穂が長引いた場合、穂揃期に達しなくても出穂直前散布7日後に薬剤を散布する。
- ④ 抵抗性の弱い品種で葉いもちが見られる場合や葉いもちの発生が多い場合は、穂揃5～7日後にも薬剤散布を行う。

【薬剤耐性いもち病菌への対策】

QoI 剤耐性菌が東北地域でも確認されている。

本県における耐性菌の発生を未然に防ぐため、地域一体となって以下の対策を実施すること。

ア QoI 剤は1年ごとに作用機構の異なる薬剤とローテーションで使用するとともに、育苗期から本田期を通じて年1回以内の使用に止める。

- ① これらの成分を含む本田散布剤は、多発時の使用を避ける。
- ② オリブライト剤 (F:11)、アミスター剤 (F:11) は同一系統剤とみなす。

イ 種子流通に伴い耐性菌が広範囲に伝播することがあるため、採種ほ及びその周辺ではこれらの成分を含む薬剤は使用しない。

ウ 自家採種は耐性菌発達の原因となるので、種子更新、塩水選及び種子消毒を行う。購入種子（他県産稲、飼料用稲を含む）でも必ず種子消毒を行う。

エ QoI 剤を使用した水田において、いもち病（葉いもち、穂いもち）が多発生した場合には、罹病葉（穂）を採取し、病害虫防除所又は関係指導機関に連絡するとともに、他系統薬剤で追加防除を行う。

※FRAC農業用殺菌剤作用機構分類の最新版はクロップライフジャパン（旧農薬工業会）ホームページ (<https://www.croplifejapan.org/activity/mechanism.html>) を参照。

【 稲こうじ病 】

- ① 穂ばらみ期の低温、日照不足、多雨で発生が多くなる。このような気象条件で前年に発生が見られた水田では必ず防除する必要がある。
- ② 稲こうじ病の防除適期は穂ばらみ期となることから、出穂20～10日前に薬剤を散布する。その後の散布では防除効果が期待できないので、生育状況を見極めながら防除を行う。

【 斑点米カメムシ類 】

- ① 斑点米カメムシ類の生息密度を低下させるためには、発生源となる雑草の刈取りが重要である。草刈りは7月中旬までに雑草が開花・結実しないように適宜行い、イネの出穂1週間前までに終える。
- ② イネの出穂間際の草刈りは、逆に水田内に追い立てることになるので注意する。やむをえずイネの出穂後に畦畔等の草刈りを行う場合は、草刈場所周辺の水田において、ネオニコチノイド系又はフェニルピラゾール系殺虫剤散布直前から1週間以内を目途に行う。また、ピレスロイド系及び有機リン系殺虫剤の場合は、1回目の散布後速やかに行う。
- ③ ノビエ、ホタルイ、シズイが多発生している水田では、斑点米カメムシ類が誘引されるので除草を徹底する。

※IRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロップライフジャパン（旧農薬工業会）ホームページ (<https://www.croplifejapan.org/activity/mechanism.html>) を参照。

【 コバネイナゴ 】

7月第3～5半旬のふ化終期に幼虫が畦畔付近に多くみられる場合は、水田の畦畔際2～3mに薬剤を散布する。

【 フタオビコヤガ 】

食害が目立ち、幼虫が見られる水田では7月上旬に薬剤を散布する。

【 その他の病害虫 】

- ① ばか苗病は、徒長あるいは枯死した罹病株を見つけ次第抜き取り、土中に埋めるなど適切に処分をして出穂後の籾への感染を防止する。

- ② イネドロオイムシの食害が目立ち、幼虫が見られる水田では7月上旬に薬剤を散布する。
- ③ ニカメイガの被害株率が4%を超えるような発生事例はなく、本種単独の防除が必要となる水田は少ない。
- ④ 長距離移動性害虫であるセジロウカ、コブノメイガの飛来時期は、例年7月上旬以降となる。今のところ発生時期、発生量の予測はできないが、今後発表される予察情報に注意し、適期防除に努める。
- ⑤ 飼料用稲についても適正な肥培管理や薬剤防除を行い、病虫害の発生源とならないよう注意する。

★農薬散布後の「止水期間は7日間」です★

水田で除草剤や水面施用剤などの農薬を使用した時には、河川に流れ出ないように散布後7日間は落水・かけ流しをしない。その間の入水は水尻を止めたままで行う。

(2) りんご

【腐らん病】

- ① 枝腐らんは、見つけ次第切り取り、適切に処分する。
 - ② 胴腐らんは、見つけ次第治療する。治療済みの病斑も随時確認し、再発が認められた場合は再度処置を行う。なお、処置方法については、青森県産業技術センターのYoutube公式チャンネルに掲載している。
(<https://www.youtube.com/@aitcofficial/videos>)
- ア トップジンMオイルペースト、フランカットスプレー又はバッチレートをを使う場合は、薬剤ごとに適切な方法で処置を行う。
- イ 泥巻きを行う場合は、水を加えて団子状にこねた泥を病斑部よりも5～6cm広めに、3～5cmの厚さに貼り付ける。さらにその上をビニール又はポリエチレンフィルムなどで被覆し、内部の泥の乾燥を防ぐようにして約1年間そのままにしておく。病斑部を軽く削り取ってから泥巻きを行うと一層効果的である。なお、火山灰土壌を使用する場合は、容積比で土が9に対してベントナイト（土壌改良資材の一種）1を加えてこねると粘着性が増し、泥巻き作業の効率が良くなる。泥を作るには、土とベントナイトをよく混ぜてから水を入れて練る。この際、ベントナイトは量が多すぎると樹皮が腐敗し、治ゆ効果も低下するので、加える量を誤らないようにする。
- ウ 胴腐らんの発病が著しい樹は、伝染源になるので積極的に伐採する。
- ③ 粗皮感染による胴腐らんの発生が多い園地では、「7月半ば」又は「7月末」にトップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍も使用する。



トップジンM
オイルペーストに
よる治療



バッチレートによ
る治療



泥巻き法による
治療

【黒星病】

- ① 自園地の状況を確認し、被害葉・被害果は見つけ次第摘み取り、土中に埋めるなど適正に処分する。
- ② 散布むらが生じないように基準薬剤を丁寧に散布する。散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

【輪紋病】

いぼ皮病斑は軽く削り取ってトップジンMペーストを塗る。

【斑点落葉病】

急増が懸念される場合は、ポリオキシシンAL水和剤も使用する。なお、ポリオキシシンAL水和剤は薬剤耐性発達の懸念があるので、連続散布を避け、「7月半ば」まではできるだけ使用しない。

【 褐斑病 】

発生が前年に多かった園地では、「7月半ば」又は「7月末」のいずれかにオンリーワンフロアブルも使用する。

【 リンゴコカクモンハマキ 】

発生の多い園地では、適期にジアミド剤（サムコルフロアブル10、エクシレルSE、テッパン液剤、フェニックスフロアブル、ヨーバルフロアブルのいずれか）を散布する。

【 クワコナカイガラムシ 】

- ① 7月中旬まで成虫が大枝の切口や木の空洞部周辺に集まるのでブラシなどでつぶす。
- ② バンド巻きによる誘殺を実施している場合は、第1世代卵のふ化前（7月20日頃）に必ず除去する。
- ③ 越冬世代成虫が多い園地では、第1世代ふ化幼虫を対象に、「7月下旬」（7月末頃）と「8月上旬」（前回の約10日後）に有機リン剤（エルサン水和剤40、ダイアジノン水和剤34、スミチオン水和剤40のいずれか）による胴木洗いを手散布で行う。

【 シンクイムシ類 】

- ① 被害果は見つけ次第摘み取り、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋めるなど処分する。
- ② モモシンクイガ対策として、毎回防除剤を使用する。また、もも、なし、すもも、マルメロなども発生源となるので、適切な管理を行う。
- ③ ナシヒメシンクイの発生が多い園地では、毎回防除剤を使用する。また、うめ、あんず、もも、なし、すもも、おうとうなども発生源となるので、適切な管理を行い、芯折れは見つけ次第剪去して処分する。
- ④ 前年に被害がなく、周辺に放任園など発生源の見られない園地で、ピレスロイド剤（バイスロイドEWまたはイカズチWDG）を使用した場合は、次の防除剤を省略できる。

【 ハダニ類 】

- ① ひこばえ（根ばや）と大枝から発出している徒長枝は早めに剪去する。
- ② 薬剤の選択に当たっては、発生しているハダニの種類を確認するとともに、散布園における薬剤抵抗性に注意する。
- ③ 殺ダニ剤は薬剤抵抗性が出やすいので、同一薬剤は年1回の使用とする。
- ④ オマイト水和剤は7月下旬までの使用を避ける。
- ⑤ ダニサラバフロアブル、スターマイトフロアブル、ダニコングフロアブルは合わせて年1回の使用とする。

【 カメムシ類 】

園内をこまめに見回り、成虫、卵塊、幼虫が確認されたら、すみやかに捕殺、除去するとともに、必要に応じて防除薬剤を散布する。

参考表 りんごに使用する農薬の作用機構分類
<殺菌剤>

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
トップジンMオイルペースト	チオファネートメチル	1	
フランカットスプレー	ポリオキシシンD亜鉛塩	19	
バッチレート	有機銅	M01	
トップジンM水和剤	チオファネートメチル	1	
ベンレート水和剤	ベノミル	1	
トップジンMペースト	チオファネートメチル	1	
ポリオキシシンAL水和剤	ポリオキシシン複合体	19	
オンリーワンフロアブル	テブコナゾール	3	

<殺虫剤>

農薬名	有効成分	IRAC コード	系統名
サムコルフロアブル10	クロラントラニリプロール	28	ジアミド剤
エクシレルSE	シアントラニリプロール	28	
テッパン液剤	シクラニリプロール	28	
フェニックスフロアブル	フルベンジアミド	28	
ヨーバルフロアブル	テトラニリプロール	28	
エルサン水和剤40	PAP	1B	有機リン剤
ダイアジノン水和剤34	ダイアジノン	1B	
スミチオン水和剤40	MEP	1B	
バイスロイドEW	シフルトリン	3A	ピレスロイド剤
イカズチWDG	シペルメトリン	3A	
オマイト水和剤	BPPS	12C	
ダニサラバフロアブル	シフルメトフェン	25A	
スターマイトフロアブル	シエノピラフェン	25A	
ダニコングフロアブル	ピフルブミド	25B	
ダニオーテフロアブル	アシノナピル	33	

注) FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロップライフジャパン（旧農薬工業会）ホームページ（<https://www.croplifejapan.org/activity/mechanism.html>）を参照。

(3) 特産果樹

○ ぶどう

【 晩腐病 】

- ① 発病果粒や発病果房は見つけ次第摘み取って、土中深く埋めるなどの処分をする。園地内の排水や通風を良くし、過湿にならないようにする。

【 褐斑病 】

- ① 「キャンベル・アーリー」、「ナイアガラ」などが発生しやすい。
- ② 樹勢の衰弱している樹に発生が多いので、肥培管理に注意して、適正着果を守り樹勢の維持に努める。

【 ベと病 】

- ① 軟弱な生育を避けるために、窒素肥料を施用し過ぎない。
- ② 発病葉や発病果房は見つけ次第、摘み取って処分する。
- ③ 排水不良園では、排水溝を掘って、雨水が長く溜まらないようにする。

○ おうとう

【 灰星病 】

実腐れは見つけ次第、摘み取って土中深く埋めるなどの処分をする。

【 ハダニ類 】

発生の多い園地では、収穫後に殺ダニ剤を使用する。

【 オウトウショウジョウバエ 】

被害果や取り残し果実及び落下した果実は発生源となり、園内密度が高まるので、速やかに処分する。

【 カメムシ類 】

- ① 成虫の飛来状況に応じて、適宜防除する。8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。
- ② 「収穫前（晩生種）」に、発生がみられた場合、テルスターフロアブルを選択する。

○ もも

【せん孔細菌病】

- ① 薬剤散布と耕種の防除を組み合わせた総合的防除を徹底する。なお、風を強く受ける地帯で多発するので、防風対策は必ず行う。
- ② 一次伝染源である春型枝病斑の切除を徹底する。また、6～8月に新梢に発生する夏型枝病斑も重要な伝染源になるので、見つけ次第切除し、速やかに処分する。被害果実も見つけ次第摘み取って適切に処分する。
- ③ 前年に果実被害が多かった園地では果実感染を防ぐため有袋栽培とする。
- ④ 発生が多い園地では「7月上旬」及び「7月中旬」にデランフロアブルを選択する。

【カメムシ類】

- ① 成虫の飛来状況に応じて、適宜防除する。8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。
- ② 成虫の飛来時期が「7月上旬」の場合はイカズチWDG、「7月中旬」はジノテフラン水溶剤（スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤）、「7月下旬」はダントツ水溶剤を選択する。

○ 西洋なし

【輪紋病】

6～7月の幼果期は最も感染しやすいので、10日間隔の薬剤散布を守る。散布予定日に降雨が予想される場合には、事前散布する。

【カメムシ類】

- ① 成虫の飛来状況に応じて、適宜防除する。8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。
- ② 「7月上旬」に発生がみられた場合は、イカズチWDGを選択する。
- ③ 「7月中旬」に発生が見られた場合は、テルスター水和剤を選択する。

参考表 特産果樹に使用する農薬の作用機構分類
<殺菌剤>

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
デランフロアブル	ジチアノン	M9	

<殺虫剤>

農薬名	有効成分	IRAC コード	系統名
テルスターフロアブル	ピフェントリン	3A	ピレスロイド剤
イカズチWDG	シペルメトリン	3A	
スタークル顆粒水溶剤	ジノテフラン	4A	ネオニコチノイド剤
アルバリン顆粒水溶剤	ジノテフラン	4A	
ダントツ水溶剤	クロチアニジン	4A	
テルスター水和剤	ピフェントリン	3A	ピレスロイド剤

注) FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロップライフジャパン（旧農薬工業会）ホームページ (<https://www.croplifejapan.org/activity/mechanism.html>) を参照。

(4) 野菜

○ じゃがいも

【疫病】

- ① 平年の初発時期は6月6半旬頃である。平均気温15℃以上で雨が2～3日続くと発生し始め、20℃前後で曇天多湿な天候が続く場合に蔓延しやすい。

- ② 発生前の予防散布は7～10日間隔を基本とするが、発生が認められた場合には蔓延防止のため、5～7日間隔で薬剤散布を行う。
- ③ 曇雨天の日が続くような場合には、散布間隔が10日以上あかないように降雨の合間をぬって薬剤散布を行う。

○ ねぎ

【べと病】

- ① 平均気温15～20℃とやや冷涼で降雨が続くと発生しやすい。
- ② 連作畑及び排水不良畑に作付けした場合や日陰で風通しの悪い場所で発生しやすい。
- ③ 発生が多くなってからの薬剤防除では効果が劣るため、発生初期の防除を徹底する。
- ④ 被害茎葉は伝染源となるので処分する。

【さび病】

- ① 夏期に低温多湿が続くと多発する傾向がある。
- ② 多発してからの薬剤散布は効果が劣るため、発生が少ないうちから定期的に防除を実施する。

【斑点性病害（黒斑病・葉枯病）】

- ① 降雨が多く、多湿な条件が続くと発生が多くなる。
- ② 肥料切れや生育後期に草勢が衰えると多発しやすくなるので、適切な肥培管理に努める。
- ③ 発生が認められたら定期的に防除を実施する。
- ④ 被害茎葉は伝染源となるので処分する。

【ネギコガ】

- ① 幼虫食入を防止する防除適期は成虫発生始期～幼虫ふ化期である。平年における第1世代成虫の発生盛期は6月下旬～7月上旬、第2世代成虫の発生盛期は7月下旬～8月上旬である。
- ② 幼虫が葉内に侵入してからでは薬剤の効果が劣ることから、成虫の発生盛期を散布適期の目安として、合成ピレスロイド剤（IRACコード3A）は成虫の発生始期～盛期に、有機リン剤（IRACコード1B）は成虫の発生盛期～ふ化盛期に散布する。

【ネギハモグリバエ・ネギアザミウマ】

- ① 高温・少雨の年に多発しやすい傾向がある。
- ② 繁殖力が旺盛であり、両種ともに約20日間で1世代を経過し、年5回以上世代を繰り返す。
- ③ 多発してからの防除では効果が期待できないので、被害葉が見え始めた頃から薬剤散布を7～10日間隔で連続散布すると効果的である。
- ④ 薬剤抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤は連用しない。合成ピレスロイド剤（IRACコード3A）の抵抗性個体群が認められていることから、防除効果の低下が懸念されるほ場では使用を控える。

○ キャベツ

【コナガ・ヨトウガ】

- ① 生育初期に多発すると芯葉部が加害され、被害が大きくなるので定植時の薬剤防除を徹底する。
- ② 生育期後半になると葉が肥大して葉裏に薬液が付着しづらくなり、防除効果が低下する。生育期中盤の防除を徹底して発生密度を低下させ、生育期終盤の出荷部位への加害を防止する。
- ③ 殺虫剤に対する抵抗性が発現しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。コナガでは、ジアミド剤（IRACコード28）の抵抗性個体群が確認されているので、防除効果が低い場合は別系統の薬剤を使用する。

○ 野菜全般

【アブラムシ類】

- ① 夏場を中心に発生が多く、降雨が少なく乾燥した気象で多発しやすい。
- ② 若い葉を好み葉裏に寄生し、多発すると葉が縮れ、生育が著しく停滞する。また、ウイルス病を媒介する。
- ③ 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除する。薬液が葉裏にも十分付着するように散布する。
- ④ 殺虫剤に対する抵抗性が発現しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。

(5) その他作物

○ 牧草、とうもろこし類等のイネ科作物

【アワヨトウ】

本虫による被害は県外からの飛来量に大きく左右される。被害が認められたほ場では以下の点に注意して防除を行う。

- ① 老齢幼虫になると防除効果が劣るので、早期発見に努め、若中齢幼虫のうちに各作物毎に登録のある殺虫剤を散布する。
- ② 水稻及びとうもろこし類へは直接産卵することではなく、ほ場周辺から幼虫が移動して食害するので、ほ場周辺の発生にも注意する。水稻では中干し時に侵入して畦畔から食害することがある。
- ③ 収穫間近の採草地では早めに刈り取りを行う。薬剤を散布した草地では家畜の放牧を控え採草給与しない。

農林水産省「農薬情報」 https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/
農林水産省「農薬登録情報提供システム」 <https://pesticide.maff.go.jp/>

～青森県農薬危害防止運動展開中！（6月1日～8月31日）～

○農作物や使用者の安全のため、農薬は使用基準を守って使用しよう！

○農薬散布の際は、周辺に農薬を飛散させないようにしよう！

☆農薬散布時は農薬の飛散防止対策をしてください☆

学校、保育所、病院、公園等の公共施設内の植物、街路樹並びに住宅地に近接する農地（市民農園や家庭菜園を含む）及び森林等において、農薬の飛散を原因とする住民や子ども等の健康被害が生じないように、飛散防止対策を徹底しましょう。農薬散布に当たっては、事前に周辺住民に対して、農薬使用の目的、散布日時、使用農薬の種類及び農薬使用者の連絡先等を幅広く周知するとともに、近辺に化学物質に敏感な人が居住していることを把握している場合には、十分配慮しましょう。

☆クロルピクリン剤の安全使用について☆

本県では、ながいもやごぼう等の根菜類の作付けが多く、土壌病害を防除するため、クロルピクリンが使用されていますが、その使用に当たっては次の事項を遵守しましょう。

<使用上の注意>

- 処理作業は、気温・地温の低い午前中か夕方に行う。
- 使用時は、防護マスクや防護メガネ等を着用する。
- 揮散したガスは低地にたまりやすいため、農地近郊の低位置に人家や畜舎等がある場合は使用しない。
- 降雨等により地下水や河川等に流入するおそれがある場合は使用しない。
- 人家や畜舎等に近接する農地での使用を避けるとともに、人家や畜舎等の近郊では、それらが風下になる場合は作業を一時中断する。
- 使用後は、直ちにポリエチレンフィルム等（厚さ0.03mm以上の厚めのもの、難透過性のもの）で被覆するなど、揮散防止のために必要な措置を講じる。
- 使用済みの空き缶等は、周囲に影響を及ぼさないよう適切に処分する。
- トラック等で薬剤を運搬する場合は、薬剤が脱落しないよう確実に固定して積載する。
- 施錠可能な冷暗所に保管する。

《当情報に関する問い合わせ先》

青森県病害虫防除所 TEL:017-729-1717 FAX:017-729-1900
〒030-0113 青森市第二問屋町4-11-6
E-mail: byogaichu@pref.aomori.lg.jp

※当情報は、青森県農業・就農情報サイト「農ナビ青森」
(<https://www.nounavi-aomori.jp/>) に掲載しています。